

智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究 (二)

程 正

前回の目次 (『駒澤大學大學院佛教學研究會年報』第

三九號 (二〇〇六年五月) に掲載分)

一 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』について

(一) 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』のテキスト

(二) 『智詵疏』と『慧淨疏』、龍大本『心經疏』との

關係

(三) 『智詵疏』の思想的特色

今回の目次

二 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注

次回の豫定

二 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注 (續)

二 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注

凡 例

* 基本的には、柳田聖山氏が校訂されたテキストを用いる。(柳田聖山『資州禪師撰・般若心經疏』考) 『禪佛敎の研究』(柳田聖山集 第一卷) 法藏館、一九九九年、三二七～三四九頁。) ただし、筆者による句讀點の直しがある。

* なお、新出のロシア本による本文の一部を校訂した。その場合、そのつど注記を施した。

* 智詵の注疏にある『心經』本文の内容を、「(色即是空)」のごとく、() 括弧を用いた。

* 脱字があったと思われる場合、「惠資(糧)」のように、() 括弧を用いた。

* 誤字があったと思われる場合、「背似龜文[紋]」のように、「」括弧を用いた。

般若波羅蜜多心經疏

資州誥禪師 撰

夫以真²宗沖³寂、妙絕名⁴詮之表、正覺幽⁵凝、高栖⁶像累之外。將求性⁷相、二有不能照其機、跡被淺深、三獸無以臻其極。即。色非色、寄無色以爲源、即¹⁰空非空、要假空而遣色。故知、萬¹¹靈無像、而爲衆像之宗、妙理無言、抑乃群言之本。蓋像出於無像、言出於無言。無言言者、或感物以言生、無像像者、或因心而著像。無言言者、故四¹²辯所以宣揚、無像像者、故丈¹³六所以垂¹⁴跡。

然『多¹⁵心經』者、乃五¹⁶乘之寶運、嚴萬法以爲尊、超八¹⁷藏之妙高、飾四¹⁸珍而獨秀。然首稱(般若)、古釋有三、今解有五。一實相、謂真理。二觀照、謂眞惠。三文字、謂眞教。四境界、謂諸法。五眷¹⁹屬、謂萬行。要須福智俱修、有無齊照。尋經究旨、合理解生。惠性、惠資(糧)俱稱般若。(波羅者)、彼岸義。亦言離義。(蜜)者、到義。由行般若波羅蜜、離諸障染、境(地)盡有無、義洞眞如、覺圓智滿。(多)者大乘總名。(心)者此經之別稱。

般若波羅蜜多心經の疏

資州の誥禪師、撰す

夫れ以るに、眞宗は沖寂にして、妙なること名詮の表を絶し、正覺は幽凝にして、高きこと像累の外に栖む。將に性相を求めんとするに、二有らば其の機を照らすこと能わず、跡は淺深を被りて、三獸も其の極に臻ること無し。即色は色に非ずとは、色無きに寄せて以て源と爲し、即空は空に非ずとは、要ず空を假りて色を遣る。故に知る、萬靈は像無くも、衆像の宗と爲り、妙理は言無くも、乃ち群言の本を抑う。蓋し像は無像より出で、言は無言より出づ。無言の言とは、或いは物を感じて以て言を生じ、無像の像とは、或いは心に因りて像を著す。無言の言とは、故に四辯を以て宣揚する所にして、無像の像とは、故に丈六を以て垂跡する所なり。

然るに『多心經』とは、乃ち五乘の寶を運び、萬法を嚴かにするを以て尊と爲し、八藏を超ゆるの妙高にして、四珍を飾りて獨り秀づ。然して首に(般若)と稱するは、古の釋に三有り、今の解に五有り。一には實相、眞理を謂う。二には觀照、眞惠を謂う。三には文字、眞教を謂う。四には境界、諸法を謂う。五には眷屬、萬行を謂う。要須ず福と智を俱に修し、有と無を齊しく照らすべし。經を尋ねて旨を究め、理に合いて解、生ず。惠の性と惠の資糧とを俱に般若と稱す。(波羅)とは、彼岸の義なり。亦た言を離るるの義なり。(蜜)とは、到るの義なり。般若波羅蜜を行するに由りて、諸もろの障染を離れ、境地は有無を盡くし、義は眞如を洞き、覺は圓にして智は滿つ。(多)とは、大乘の總名

《經》者、爲常、爲法。是攝、是觀。常即道冠百王、法乃楷²⁰模千葉、攝則集斯妙理、觀則悟彼群生。庶令必離苦²¹津、終登彼岸。《一卷》者、首軸無二、名之爲一、開合²²卷舒、目之爲卷。故言《般若波羅蜜多心經一卷》。

觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時。

義云、「將釋此經、略以九門分別。第一、初入觀門緣起分。第二、了蘊虛²³通度厄分。第三、空色一如無二分。第四、垢淨唯眞無妄分。第五、根塵體同名異分。第六、三²⁴乘境界俱空分。第七、舉勝明空離障分。第八、大智乘因至果分。第九、護難流通神²⁵呪分。」

又就此門中、復開爲四。一教不思議、二理不思議、三行不思議、四果不思議。第一教不思議者、此『蜜多心經』、三乘具足、文義深妙。若有受持讀誦者、功德甚多。故言教不思議。第二理不思議者、依教詮理、即是理不思議。第三行不思議、依理修行。故名行不思議。

なり。《心》とは、此の經の別稱なり。《經》とは、爲^はた常にして、爲^はた法なり。是^はた攝にして、是^はた觀なり。常とは即ち百王に冠^はたるを道い、法とは乃ち千葉の楷^は模^はたり。攝とは則ち斯の妙理を集め、觀とは則ち彼の群生を悟る。庶^はわくは必ずや苦^く津^{しん}を離れ、終には彼岸に登らしめんことを。《一卷》とは、首軸に二無し、これを名づけて一と爲し、開合して卷舒するは、これを目^めけて卷^まと爲す。故に《般若波羅蜜多心經一卷》と云う。

觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時。

義に云く、「將に此の經を釋せんとするに、略して九門を以て分別す。第一は、初めに觀門に入るの緣起の分なり。第二は、蘊の虚通なるを了じて、厄を度するの分なり。第三は、空と色の一如にして、二無きの分なり。第四は、垢と淨の唯だ眞のみにして、妄無きの分なり。第五は、根と塵との體は同なるも名は異なるの分なり。第六は、三乘の境と觀と、俱に空なるの分なり。第七は、勝を擧げ、空を明らめ、障を離るるの分なり。第八は、大智の因に乗りて、果に至るの分なり。第九は、難より護りて、神呪を流通するの分なり」と。

又た此の門の中に就いては、復た開きて四と爲す。一は、教の不思議なり、二は、理の不思議なり、三は、行の不思議なり、四は、果の不思議なり。第一の教の不思議とは、此の『蜜多心經』は、三乘を具足し、文義も深妙なり。若し受持し讀誦する者有らば、功德は甚だ多し。故に教の不思議と云う。第二の理の不思議とは、教に依りて理を詮^たせば、即ち是れ理の不思議なり。第三の行の不思議とは、理に依りて修行す。故

議。第四果不思議者、依行證果、即是果不思議。並非心能思、非口能議。故名不思議。

又就前「初入觀門緣起分」中、文有兩段。初先標能行人、即是「觀自在菩薩」。次明所行法、即是「行深般若波羅蜜多時」。

般若若之中、約爲三分。第一文字、爲淺般若。第二依文發惠、名中般若。第三照見五蘊體空、名深般若。次明空色俱遣。自此已下、廣明實義分。以前爲小菩薩說人空、以後爲大菩薩說法空。先明生滅・垢淨・增減不可得、次明色心不可得、後明三乘境觀俱不可得。先明中乘(無無明亦無無明盡)、即無中乘境。(乃至無老死亦無老死盡)、即無中乘觀。無苦・集、即無小乘境。(無苦集滅道)、即無小乘觀。(無智亦無得)、即無大乘境。(以無所得故)、即無大乘觀。

觀自在菩薩。

義云、「(觀)者慧也。慧能觀察善・惡等事、能見人・法・二空之理。有無齊遣、藥病二亡。不緣於相、攝境歸心。心境俱泯、無有二相、

に行の不思議と名づく。第四の果の不思議とは、行に依りて果を證せば、即ち是れ果の不思議なり。並て心もて能く思うに非ず、口もて能く議するに非ず。故に不思議と名づく。

又た前の「初めに觀門に入るの緣起の分」の中に就いては、文に兩段有り。初めに先ず能く行ずる人を標せば、即ち是れ「觀自在菩薩」なり。次に行ずる所の法を明らむれば、即ち是れ「行深般若波羅蜜多時」なり。

般若の中に就いては、約して三分と爲す。第一は文字なれば、淺般若と爲す。第二は文に依りて惠を發せば、中般若と名づく。第三は五蘊の體の空なるを照見せば、深般若と名づく。次に空・色を俱に遣るを明らめんとす。此れより已下は、廣く實義を明らむるの分なり。以前は小菩薩の爲に人の空なるを説き、以後は大菩薩の爲に法の空なるを説くなり。先ずは生と滅・垢と淨・増と減の不可得なるを明らめ、次には色と心の不可得なるを明らめ、後には三乘の境と觀と、俱に不可得なるを明らむ。先ず中乘の(無無明亦無無明盡)なるを明らむれば、即ち中乘の境無し。(乃至無老死亦無老死盡)なれば、即ち中乘の觀も無し。苦・集無くば、即ち小乘の境無し。(無苦集滅道)なれば、即ち小乘の觀も無し。(無智亦無得)なれば、即ち大乘の境無し。(以無所得故)なれば、即ち大乘の觀も無し。

觀自在菩薩。

義に云く、「(觀)とは、慧なり。慧は能く善惡等の事を觀察し、能く人・法・二空の理を見る。有と無を齊しく遣り、藥と病を二つながら亡ず。相に緣らずして、境を攝して心に歸す。心・境俱に泯じ、二相有ること

猶如虛空。觀有不住於有、觀空不著於空、聞名不惑於名、見相不沒於相。無即不破於有、一切皆無。有即不壞於無、一切皆有。故知、心不能動、境不能移。隨動隨移、不亂真實。證此理法、名爲無礙智慧、名之爲「觀」。

言「自在」、乃是諸佛菩薩不思議解脫之心、神通自在之力。菩薩乃能毛端吸於巨海、芥子納於須彌。芥子及毛端、二俱喻心、須彌大海、二俱喻境。菩薩正念須彌大海之時、須彌大海、正在菩薩念中。即是芥子納於須彌、毛端吸於巨海。心喻芥子、芥子不大、境喻須彌、須彌不小、而能容受。不寬不窄、乾坤宛然、本相如故、即是諸佛菩薩不思議解脫之心、自在神通之力也。

所以然者、一切諸法、以心爲本。心生故、即種々法生、心滅故、即種々法滅。三界・六道本由自是心生、淨土穢土悉由心造。心外無別境、境外無別心。心外無境、無境故無心。境外無心、無心故無境。無心無境、名爲「般若」。

先明「自在」、說法顯勝、於觀無滯、内外明徹、即妄想不生、法界常安、觸途皆妙、

無きは、猶如虚空の如し。有を觀るに有に住らず、空を觀るに空に著せず、名を聞くに名に惑わされず、相を見るに相に没せられず。無は即ち有を破らずして、一切は皆な無なり。有は即ち無を壞せずして、一切は皆な有なり。故に知る、「心は動ずること能わず、境は移ること能わず。動ずるに隨うも、移るに隨うも、眞實を亂さず」と。此の理法を證するを、名づけて無礙の慧と爲し、之れを名づけて「觀」と爲す。

「自在」と言うは、乃ち是れ諸佛菩薩の不思議解脫の心にして、神通自在の力なり。菩薩は乃ち能く毛端もて巨海を吸い、芥子もて須彌を納む。芥子及び毛端は、二つ俱に心に喩え、須彌と大海とは、二つ俱に境に喩う。菩薩の須彌と大海を正念するの時には、須彌と大海は正に菩薩の念の中に在り。即ち是れは芥子の須彌を納め、毛端の巨海を吸うなり。心を芥子に喩うるも、芥子は大ならず、境を須彌に喩うるも、須彌は小ならず、而して能く容受す。寛からず窄からず、乾坤宛然として、本相の如なるが故に、即ち是れ諸佛菩薩の不思議解脫の心にして、自在神通の力なり。

所以然れば、一切の諸法は、心を以て本と爲す。心、生ずるが故に、即ち種々の法も生じ、心、滅するが故に、即ち種々の法も滅す。三界・六道は本より自ずから是の心より生じ、淨土も穢土も悉く心より造らる。心の外に別に境無く、境の外に別に心無し。心の外に境無く、境無きが故に心も無し。境の外に心無く、心無きが故に境も無し。心も無く境も無きを、名づけて「般若」と爲す。

先ず「自在」を明らむるに、法を説きて勝を顯わし、觀に於いて滯ること無く、内外に明徹せば、即ち妄想も生ぜず、法界も常に安らかに、

濟³⁵物稱心。故云(自在)。若被妄想翳障眞如、即遍固法界、觸事皆礙、不名自在。

又言(自在)者、觀色空、眼自在、觀聲空、耳自在、觀香空、鼻自在、觀味空、舌自在、觀觸空、身自在、觀法³⁶塵空、即意自在。

觀心空、即內自在、所觀境不實、即外在。觀照內外、人・法俱空、即心無障礙。故言觀自在行者等。

若不以此智慧觀諸法空、即攀緣心起。由心起故、即取塵造業。由業成就、即名業障之人。障其聖道、不名自在。乃爲煩惱鎖、無明鎖、妄想鎖、名相鎖、貪瞋癡鎖、鎖諸衆生於五蘊柱、繞³⁷二十五有、循環六道、經歷三³⁸塗、恆受諸苦、不名自在。

〔菩薩〕者、是西域名、亦名菩³⁹提質諦薩埵。此云道心衆生。菩提名道、質諦名心、薩埵名衆生。道者通達佛道義。通謂虛通、達謂了達。了達人・法俱空、現行隨⁴⁰眠、習⁴¹氣俱滅、煩惱總盡、而無障礙。有不礙空、空不礙有。以空爲有、以有爲空。以空爲有、故即非有。以有爲空、故即非空。非空非有、故名爲有。

觸^{そく}途^とも皆な妙にして、濟物も心に稱^{かな}う。故に(自在)と云う。若し妄想に眞如を翳障せらるれば、即ち遍く法界を固め、事に觸すれば皆な礙なるを、自在と名づけず。

又た(自在)と言は、色の空なるを觀るは、眼の自在、聲の空なるを觀るは、耳の自在、香の空なるを觀るは、鼻の自在、味の空なるを觀るは、舌の自在、觸の空なるを觀るは、身の自在、法塵の空なるを觀るは、即ち意の自在なり。

心の空なるを觀るは、即ち内の自在にして、觀らるる境の實ならざるは、即ち外の自在なり。内外を觀照するに、人・法俱に空なれば、即ち心に障礙無し。故に觀自在行者等と言う。

若し此の智慧を以て、諸法の空なるを觀ざれば、即ち攀緣の心起くる。心の起くるに由るが故に、即ち塵を取りて業を造る。業の成就するに由りて、即ち業障の人と名づく。其の聖道を障ぐるを、自在とは名づけず。乃ち煩惱の鎖、無明の鎖、妄想の鎖、名相の鎖、貪瞋癡の鎖の爲に、諸もろの衆生は五蘊の柱に鎖^とされ、二十五有に繞かれ、六道に循環^{さんづ}し、三塗^{けちご}を經歷し、恆に諸もろの苦を受くるを、自在とは名づけず。

〔菩薩〕とは、是れ西域の名にして、亦た菩提質諦薩埵と名づく。此に道心の衆生と云う。菩提は道と名づけ、質諦は心と名づけ、薩埵は衆生と名づく。道とは佛道に通達するの義なり。通とは虚通を謂い、達とは了達を謂う。人・法俱に空なるを了達せば、現に行ずる隨眠、習氣俱に滅し、煩惱總て盡きて、障礙無し。有は空を礙^さげず、空は有を礙^さげず。空を以て有と爲し、有を以て空と爲す。空を以て有と爲す、故に即ち有に非ず。有を以て空となす、故に即ち空に非ず。空に非ず有に非

道。即如世間之道、若爲有荊棘藜林、坑窞等境、障人行路、不名爲道。若人起貪瞋癡等、愛染六塵、能障智慧、六度不通。即一切俱礙、不名爲道。即心如道、即道如心、一體一合。故名爲道。又菩薩者、菩之言普、薩之言濟。普濟有情。故云〔菩薩〕。又云、菩之言結、薩之言散。煩惱垢結、因此智慧、而得解散。故言〔菩薩〕。

行深般若波羅蜜多時。

義云、〔行〕者、以無漏智、照見六根・六識・六塵・五蘊・十二入、觀心不闕、與理相應、念念進取眞如之理、無時暫捨。故名爲〔行〕。〔深〕者、了達人・法俱空、色・心齊遣、境・觀兩忘。出於於心量之表、離於言說之外、非口所宣、非心所測、非二乘境界、唯佛與佛、乃能知之。故名爲〔深〕。〔般若〕者、有二義。一是清淨・勝妙義。二是智慧義。智能觀有、慧能觀空、空有俱遣。名爲智慧。〔波羅〕者、亦有二義。一是此岸義、二彼岸義。此岸復有二種。一是分段生死、二是變易生死。變易生死者、是二乘此岸、分段生死者、

故に名づけて道と爲す。即ち世間の道の如きは、若し荊棘・藜林・坑窞等の境有りと爲さば、人の行路を障げ、名づけて道とは爲さず。若し人の貪・瞋・癡等を起さば、六塵に愛染し、能く智慧を障げ、六度は通ぜず。即ち一切は俱に礙ぐれば、名づけて道とは爲さず。即心は道の如く、即道は心の如く、一の體にして一に合す。故に名づけて道と爲す。又た〔菩薩〕とは、菩は之れを普と言ひ、薩は之れを濟と言う。普く有情を濟う。故に〔菩薩〕と云う。又た云わく、菩は之れを結と言ひ、薩は之れを散と言う。煩惱の垢の結はるるも、此の智慧に因りて、解き散ずるを得。故に〔菩薩〕と言う」と。

行深般若波羅蜜多時。

義に云く、〔行〕とは、無漏の智を以て、六根・六識・六塵・五蘊・十二入を照見し、心の闕けざるを觀て、理と相應し、念念に眞如の理を進取して、時として暫くも捨つること無し。故に名づけて〔行〕と爲す。〔深〕とは、人・法俱に空なるを了達して、色・心齊しく遣り、境・觀兩つながら忘す。心量の表を出で、言說の外を離れ、口もて宣ぶる所に非ず、心もて測る所に非ず、二乗の境界に非ず、唯だ佛と佛とのみ、乃ち能く之れを知る。故に名づけて〔深〕と爲す。〔般若〕とは、二つの義有り。一は是れ清淨・勝妙の義なり。二は是れ智慧の義なり。智は能く有を觀、慧は能く空を觀、空と有とを俱に遣る。名づけて智慧と爲す。〔波羅〕とは、亦た二つの義有り。一は是れ此岸の義なり、二は彼岸の義なり。此岸には復た二種有り。一は是れ分段生死なり、二は是れ變易生死なり。變易生死とは、是れ二乘の此岸なり、分段生死とは、是

是凡夫此岸。彼岸者有其五種。一是教彼岸、二是理彼岸、三是境彼岸、四是行彼岸、五是果彼岸。又云、『三界火宅、有爲生死、即是此岸。出離生死、證得涅槃、即是彼岸。』善男子、若用此般若方便之船、運載衆生、得度生死煩惱之津、超出淤泥、即到涅槃清淨彼岸。故曰《波羅》。《蜜多》者、亦有二義。一是離義、二是到義。到者、乘因至果、到涅槃。離者、能用無漏智、遠離生死大苦海故、即得清淨・勝妙智慧、到彼岸也。」

問曰、「生死爲此岸、涅槃爲彼岸。未審中間體性如何。」答曰、「若離變易、未至涅槃。在其中間、名劣無漏種。既非二邊、亦名中道義。」

《時》者、諸佛・菩薩說法之時、名之爲《時》。座下聽衆悟道之時、名之爲《時》。譬如千年暗室、明燈纔照、暗境即無。一切衆生、從無始生死已來、及以今身、無明被底、煩惱蔽障、造種々惡業、薰在識中、成就無量無邊三塗種子。若以智慧、反照心源、一念之間、所有一切業障・報障・煩惱障、悉皆消滅。即渡生死煩惱大海、得至涅槃彼岸之時。此之一唱「章」、雖有多意不同、惣明初入觀門緣

れ凡夫の此岸なり。彼岸とは其れに五種有り。一は是れ教彼岸、二は是れ理彼岸、三は是れ境彼岸、四は是れ行彼岸、五は是れ果彼岸なり。又た云く、『三界は火宅にして、有爲の生死なるは、即ち是れ此岸なり。生死を出離し、涅槃を證得するは、即ち是れ彼岸なり』と。善男子よ、若し此の般若の方便の船を用いて、衆生を運載し、生死煩惱の津を度すを得、淤泥を超出せば、即ち涅槃にして清淨なる彼岸に到る。故に《波羅》と曰う。《蜜多》とは、亦た二つの義有り。一は是れ離の義、二は是れ到の義なり。到とは、因に乘りて果に至り、涅槃に到る。離とは、能く無漏の智を用いて、生死の大苦海を遠離するが故に、即ち清淨・勝妙なる智慧を得て、彼岸に到る」と。

問いて曰く、「生死を此岸と爲し、涅槃を彼岸と爲す。未審、中間の體性は如何」と。答えて曰く、「若し變易を離るれば、未だ涅槃に至らず。其の中間に在るを、劣れる無漏の種と名づく。既に二邊に非ざれば、亦た中道の義と名づく」と。

《時》とは、諸佛・菩薩の說法せる時を、之れを名づけて《時》と爲す。座下の聽衆の悟道せるの時を、之れを名づけて《時》と爲す。譬えば千年の暗室に、明燈の纔に照せば、暗境即ち無きが如し。一切の衆生は、無始の生死より已來、今身に及び無明の被底に、煩惱の蔽障され、種々の惡業を造り、識の中に薰在し、無量無邊の三塗の種子を成就せり。若し智慧を以て、心源を反照せば、一念の間に所有る一切の業障・報障・煩惱障は、悉く皆な消滅す。即ち生死の煩惱の大海を渡りて、涅槃の彼岸に至るを得るの時なり。此の一唱「章」は、意多く有りて不同なりと雖も、惣じて「初めに觀門に入るの緣起の分」を明らかにせり。

起分。

自此已下、第二了蘊虛通度厄分。

照見五蘊皆空、度一切苦厄。

義曰、「照見」者慧也。如燈照暗、燈至而暗除。心55鏡高懸、慧生而無明滅。又云、「照」者心也。「見」者眼也。』心眼清淨、所觀之境、一切萬法、幻化生滅、皆悉是空、虛妄不實。名爲「照見」。「五蘊」者、以積聚爲義、色・受・想・行・識是也。質礙爲色、領納爲受、取捨爲想、造作爲行、了別爲識。此之五種、皆由妄想、積聚諸業、以成其身。蘊蓋衆生身中佛性、不得顯現。名之爲蘊。亦名五蘊、釋有五義。衆生若能了達、即能觀色猶如聚沫、不可撮摩。一切衆生、執著名利、經求財色、至死不休。名爲色蘊。若能觀受、如泡不得久立。受者領納爲義。因眼見色、納於心識、貪愛・取著、生死爲業。名爲受蘊。若能觀想、如陽焰從渴愛生。想者、緣慮爲義。思想計念五欲境界、受煩惱苦、不得解脫。名爲想蘊。若能觀行、如芭蕉中、無有堅實。行者遷流・造作爲義。心有貪求、駢57駢碌碌、終日竟夜、經求財色、不知厭足。名

此れより已下は、第二の「蘊の虚通なるを了じて厄を度するの分」を明らめん。

照見五蘊皆空、度一切苦厄。

義に曰く、「照見」とは慧なり。燈りの暗きを照らすが如く、燈りの至れば暗きは除かる。心鏡を高く懸くれば、慧、生じて無明は滅す。又た云く、「照」とは心なり。「見」とは眼なり』と。心と眼の清淨なれば、觀る所の境なる一切の萬法は、幻化し生滅し、皆悉く是れ空にして、虚妄こもにして實ならず。名づけて「照見」と爲す。「五蘊」とは、積聚を以て義と爲し、色・受・想・行・識は是れなり。質礙ぜつげを色と爲し、領納を受と爲し、取捨を想と爲し、造作を行と爲し、了別を識と爲す。此の五種は、皆な妄想によりて、諸もろの業を積聚し、以て其の身を成す。蘊は衆生の身中の佛性を蓋い、顯現するを得ず。之れを名づけて蘊と爲す。亦た「五蘊」と名づけ、釋するに五義有り。衆生の若し能く了達せば、即ち能く色の猶お聚沫じゆまの撮摩すべからざるが如きを觀る。一切衆生は、名利に執着し、經つねに財色を求めて、死に至るも休めず。名づけて色蘊と爲す。若し能く受を觀ば、泡の久しく立つるを得ざるが如し。受とは領納を義と爲す。眼に因りて色を見、心識に納めて、貪愛・取著して生死の業を爲す。名づけて受蘊と爲す。若し能く想を觀ば、陽焰の渴愛より生ずるが如し。想とは、緣慮を義と爲す。五欲の境界を思想し計念して、煩惱の苦を受け、解脫を得ず。名づけて想蘊と爲す。若し能く行を觀ば、芭蕉の中に堅き實の有ること無きが如し。行とは遷流・造作を義と爲す。心に貪求有りて、駢駢へんへん碌碌として、終日竟夜まげに經たづに財色

爲行蘊。若能見識、如幻化。識者了別爲義。見世善惡、隨心即喜、違意即瞋、妄生執着、是非分別、障諸聖道。名爲識蘊。(皆空)者、幻化不實。愚人見之爲實、智者了達、一一蘊蔭中、觀其體性、無有一實。理寂無染、妄想不生。故曰(皆空)。

〈度一切苦厄〉者、略而言之、三界・四生、俱同一體。各由過去無明業愛、以爲因緣、薰善成惡。果報差別、皆依五蘊而起八苦、三界受生、不得解脫。名爲(苦厄)。八苦者、一貧窮困苦、二愛別離苦、三怨憎會苦、四求不得苦、五生苦、六老苦、七病苦、八死苦。

又一釋云、貧窮困苦者、皆由過去不修六度、今生受報辛苦、經求皆不得如意。名貧窮困苦。愛別離苦者、或別父母・兄弟・眷屬、少夭老亡、長征離別、恩愛情深、啼泣、大哭、憂悲・苦惱之所燒煮。名愛別離苦。怨憎會苦者、或時に夫妻不和、男女不孝。或遇惡眷屬、遞相酬害、至死不休。並是怨家惡業相對。名怨憎會苦。生苦者、前生種苦因、今生受苦果。飢寒並至、王役牽纏、鞭脊打背、受諸苦痛。名爲生苦。老苦者、髮白面

を求めて、厭足を知らず。名づけて行蘊と爲す。若し能く識を見れば、幻化の如し。識とは了別を義と爲す。世の善惡を見て、心に隨えば即ち喜び、意に違えば即ち瞋り、妄りに執着を生じ、是非を分別し、諸もろの聖道を障ぐ。名づけて識蘊と爲す。(皆空)とは、幻化にして實ならず。愚人は之れを見て實と爲すも、智者は一一の蘊蔭の中に、其の體性を觀るに、一つの實なるも有ること無きを了達す。理は寂にして染まること無く、妄想は生ぜず。故に(皆空)と曰う。

〈度一切苦厄〉とは、略して之れを言えば、三界・四生は、俱に同一の體なり。各おの過去の無明の業愛に由りて、以て因緣と爲し、善を薰じ、惡を成す。果報の差別は、皆な五蘊に依りて八苦を起し、三界に生を受けて、解脫を得ず。名づけて(苦厄)と爲す。八苦とは、一に貧窮困苦、二に愛別離苦、三に怨憎會苦、四に求不得苦、五に生苦、六に老苦、七に病苦、八に死苦なり。

又一一を釋して云うに、貧窮困苦とは、皆な過去に六度を修せざるに由りて、今生に辛苦の報いを受けて、經に求むるも皆な意の如くならず。貧窮困苦と名づく。愛別離苦とは、或いは父母・兄弟・眷屬と別れ、少くして天し、老いて亡じ、長征にて離別するに、恩愛の情は深くして、啼泣し、大哭し、憂悲・苦惱の燒煮する所なり。愛別離苦と名づく。怨憎會苦とは、或いは時に夫妻和せず、男女孝せず。或いは惡の眷屬に遇いて、遞相に酬害し、死に至るも休まず。並て是れ怨家の惡業と相對す。怨憎會苦と名づく。生苦とは、前生に苦因を種え、今生に苦果を受く。飢寒並に至り、王役に纏され、脊を鞭うたれ、背を打たれて、諸もろの苦痛を受く。名づけて生苦と爲す。老苦とは、髮白まり、面皺み、

皺、著杖盈歩、將死不久。肚如鮮袋、背似龜文〔紋〕。耳聾眼暗、貧窮無子。苦痛・悲酸、不能起心。故名老苦。病苦者、無問老・少、病患纏身、困在牀枕。屎尿臭處、不淨流溢、蜣螂諸虫、而集其上、恐怖變拔。如是、求生不得、求死不得。拷楚萬端、受其苦痛。死苦者、臨命終時、慌言・寐語、努眼・降聲、擅拳、捋肘、兩手摸空、白汗流出、精神撩亂、始得命終。魂歸惡道、地獄受苦、無有出期。名爲死苦。

又五盛蔭〔五蔭盛〕苦者、一者五盛蔭〔蔭盛〕、二者三毒盛、三者財色盛。當盛之時、不避火傷、不畏刀劍、造作惡業、受大苦痛煩惱。名爲五盛蔭苦。若人在世、樂修功德、行六波羅蜜、悟解大乘、即生西方、受諸快樂、度度一切生死苦海。故言〔照見五蘊皆空、度一切苦厄〕。

問曰、「界有五蘊、五蘊以爲苦。無色界中無色蘊、應當無八苦。」答曰、「無色界中、雖無麤色、細色仍存。世尊入涅槃時、無色界諸天、淚下如雨。若無有色、淚從何來。細色未亡、識種種由在。雖居八定、見相未除、來往循環、不離八苦。」向來所說、雖有多意不

杖を著きて盈歩し、將に死の久しからず。肚は鮮袋の如く、背は龜の文〔紋〕に似たり。耳は聾し、眼は暗く、貧窮にして子無し。苦痛・悲酸にして、心を起すこと能わず。故に老苦と名づく。病苦とは、老・少を問うこと無く、病患、身に纏い、牀枕に困在す。屎尿の臭き處に、不淨の流溢し、蜣螂の諸虫は、而して其の上に集まり、恐怖なること變拔す。是の如く、生を求むるも得ず、死を求むるも得ず。拷楚は萬端にして、その苦痛を受く。死苦とは、命の終わりに臨む時、慌言・寐語し、努眼・降聲し、擅拳捋肘し、兩手もて空を摸り、白汗を流出し、精神は撩亂して、始めて命の終わりを得。魂は惡道に歸し、地獄にて苦を受け、出づる期有ること無し。名づけて死苦と爲す。

又た五盛蔭苦とは、一は五蔭の盛んなり、二は三毒の盛んなり、三は財色の盛んなるなり。當に盛んなるの時に、火傷を避けず、刀劍を畏れず。惡業を造作して、大苦痛の煩惱を受く。名づけて五盛蔭苦と爲す。若し人の世に在りて樂いて功德を修し、六波羅蜜を行じ、大乘を悟解せば、即ち西方に生まれ、諸もろの快樂を受け、一切の生死の苦海より度するを得。故に〔照見五蘊皆空、度一切苦厄〕と云う。

問うて曰く、「界には五蘊有りて、五蘊を以て苦と爲す。無色界の中には色蘊無くば、應當に八苦も無かるべし」と。答えて曰く、「無色界の中には、麤色無しと雖も、細色仍お存す。世尊、涅槃に入るの時、無色界の諸天の涙を下すこと雨の如し。若し色の有ること無くば、涙何こより來たるや。細色は未だ亡ぜざれば、識種由お在り。八定に居ると雖も、見相は未だ除かれず、來往循環し、八苦を離れず」と。向來に

同、總明了蘊虛通度厄分。

自此已下、第三明空色一如無二分。

説く所は、多意有りて同ぜざると雖も、總じて「蘊の虛通なるを了じて、厄を度するの分」を明らめたり。
此れより已下は、第三の「空と色の一如にして、二無きの分」を明らめん。

注記：

- 1 資州詵禪師：資州智詵(六〇九〜七〇二)のこと。汝南(河南省)の人で、俗姓は周氏。祖父の任官より蜀(四川省)に入る。一三歳で出家。初めに玄奘に經論を學び、のち馮茂山の五祖弘忍に投じその法を嗣ぐ。資州(四川省)徳純寺に住した。『心經疏』以外に、『虛融觀』(三卷)、『縁起』(二卷)などの著作があつたとされるが、いずれも現存しない。さらに、七七五年頃成立した淨衆・保唐宗系の燈史の書である『歷代法寶記』によれば、萬歲通天二年(六九六)七月に、則天武后の詔により上京し、六祖慧能が所持していた達摩所傳の袈裟を與えられたという。長安二年(七〇二)七月に示寂。世壽九四歳。
- 2 眞宗：眞實の宗旨を指す。ただし、初期中國禪宗において、『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要訣』や

- 3 『大乘開心顯性頓悟眞宗論』などのタイトルにみるように、禪宗各派において自己の據つて立つ立場の宗旨を指している。
- 4 冲寂：ひっそりと静か、奥深く静かなこと。『魏書』卷七十二、列傳第六十「陽尼傳」に、「除紛競而靖默兮、守冲寂以無爲。」とある。
- 5 名詮之表：名前をつけ、言葉によつて表現すること。幽凝：静かで奥深いこと。『弘明集』卷七、「戎華論折顧道士夷夏論」に、「若語其眞照也、則忘慮而幽凝言絶者也。」(T52-47a)とある。また、『梁高僧傳』卷一四に、「原夫至道冲漠、假蹄筌而後彰。玄致幽凝、藉師保以成用。」(T50-48b)とある。
- 6 像累之外：想像の及ぶ範疇の外のこと。
- 7 性・相：ものの本質と現象のこと。

8 三獸：…兔、馬、象のこと。「三獸渡河」の例で示され、三獸が川を渡るとき、兔の足は水上に、馬の足は水中に、象の足は水底に至ることにより、聲聞、縁覺、菩薩の悟りに譬えられる。

9 即色：…ほかならぬ色そのものの意。
10 即空：…ほかならぬ空そのものの意。

11 萬靈：…あらゆる心のあるものを意味する。

12 四辯：…四無礙辯のこと。また四無礙智、四無礙解ともいう。四種の自由自在で障りのない理解・表現能力の意。四種とは、(1) 法無礙(教えについて滞ることのないこと)、(2) 義無礙(教えの表す意義内容を知って滞ることのないこと)、(3) 辭無礙または詞無礙(諸方の言語に通達していて自在であること)、(4) 樂說無礙または辯無礙智(上記の三種の無礙をもって衆生のために自在に説くこと)である。

13 丈六：…一丈六尺のことで、普通の化身佛の身長とされる。普通の人は身長八尺で佛はこれに倍するところから丈六という。

14 垂跡：…悟りの世界にいる佛・菩薩や高德の聖者などが、衆生を救うために、假のすがたをもってこの世に出現すること。

15 『多心經』：…『般若波羅蜜多心經』の略稱。インドの原語を無視した中國佛敎者による表現。なお、こ

れについては、福井文雅の『般若心經の總合的研究』(春秋社、二〇〇〇年)や、拙論「唐代社會における『般若心經』の位置づけ」(『宗敎學論集』第二五輯、二〇〇六年)などを合わせて参照されたい。

16 五乘：…人、天の世間の二乗と聲聞、縁覺、菩薩の出世間の三乗を合わせて五乗という。

17 八藏：…胎化藏、中陰藏、摩訶衍方等藏、戒律藏、十住菩薩藏、雜藏、金剛藏、佛藏の八藏を指す。『菩薩處胎經』卷七、出經品第三八に、「最初出經胎化藏爲第一、中陰藏第二、摩訶衍方等藏第三、戒律藏第四、十住菩薩藏第五、雜藏第六、金剛藏第七、佛藏第八。是爲釋迦文佛、經法具足矣。」(T12-1058b)とある。

18 四珍：…四つの寶藏を指す。『增壹阿含經』卷四四、十不善品第四八に、「如今、阿難、四珍之藏。乾陀越國伊羅鉢寶藏。多諸珍琦異物、不可稱計。第二彌梯羅國般網大藏。亦多珍寶。第三須賴吒大國有寶藏。亦多珍寶。第四婆羅奈蟻佉有大藏。多諸珍寶、不可稱計。此四大藏自然應現。」(T2-788a)とある。『佛說彌勒下生經』にも同様の句が見られる(T14-421b)。『說無垢稱經贊』卷二には、別の四珍を説いて、「須彌山者、此名妙高。水上高八萬踰繕那、四寶所成名妙。妙是勝義。依今大乘、東面金、西面銀、南面琉璃、北面

水精。用此四珍之所集成。故名大寶。」(T38—1018c)とある。

眷屬：眷顧隷屬の略、とりまきのこと。

20 楷模千葉：後世の二本となること。楷模は、『後漢書』卷六十四、列傳第五十四の「盧植傳」に「士之楷模、國之楨幹也。」とある。千葉は、千年と同義で、後世を意味する。『廣弘明集』卷一四、内徳論通命篇第二に、「爲善爲惡之報、窮枝派於千葉。一厚一薄之命、照根源于萬古。辯六趣之往來、示三世之殃福。」(T52—191b)とあり、卷二九に、「臣聞毀忠謗善、經千葉而不無。邪臣逆子、歷百代而常有。」(T52—348a)とある。

21 苦津：苦しみの深いことを河津に譬えた語。『大智度論』卷一一、釋初品中、讚檀波羅蜜義第十八に、「復次、大慧之人、有心之士、乃能覺悟。知身如幻、財不可保、萬物無常、唯福可恃。將人出苦津、通大道。」(T25—140b)とある。

22 開合卷舒：書物を開いたり合たり、卷軸を卷いたり舒けたりすること。

23 虚通：空無かつ融通無礙のありよう。『昭明文選』卷二五に、「廣雅』曰、廓、空也。靡結、謂體道虚通、心無怨結也。福爲禍始、禍作福階。言無常也。」とある。一方、禪宗文獻でもしばしば見い出され、例え

ば、『二入四行論』に、「有四種佛說法。所謂法佛説、自體虚通法。報佛説、妄想不實法。智慧佛説、離覺法。應化佛説、六波羅密法。」(椎名宏雄「天順本」『菩提達摩四行論』)〔駒澤大學佛教學部研究紀要』第五四號、一九九六年)、二二頁)とあり、また淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』にも、「心淨不動、境淨不移、物我虚通、一切無礙。故言自在菩薩也。」(拙論『淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究』〔駒澤大學禪研究所年報』第一七號、二〇〇六年)、一九五頁)の用例がみられる。

24 三乘：大乘、中乘、小乘の三乘を指す。傳統的な解釋では、聲聞乘、緣覺乘、佛・菩薩乘の三乘をいうが、智詁は、あえて聲聞乘を小乘、緣覺乘を中乘、佛・菩薩乘を大乘と解した。「無無明亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡」から「無智亦無得」までの本文を参照。神呪：神妙なる呪文のこと。『般若心經』の最後に、書かれている呪文を指す。

25 不可得：あらゆるものは、固定的な不變の自體としては、存在しえない、ということ。

26 無礙慧：何ものにもとらわれないことのない自在の智慧のこと。

27 不思議解脫之心：『維摩經』に由來する言葉で、見聞覺知を離れた眞實の悟りの境地。『維摩經』卷下、

28

- 囑累品第一四に、「佛言、阿難、是經名爲維摩詰所說。亦名不可思議解脫法門。」(T14-577b)とある。そのほかにも、この『經』には「不可思議解脫」の用例が隨處に見られる。
- 29 神通自在：融通無碍、自由自在の意。
- 30 毛端吸於巨海、云々：法藏の『華嚴策林』に、「小無定性、終自遍於十方。大非定形、歷劫皎於一世。則知、小時正大、芥子納於須彌。大時正小、海水納於毛孔。」(T45-577c)とある。
- 31 乾坤宛然：天地宇宙の歴然として明瞭なさま。『關尹子』の「五鑑」に「譬猶昔游再到、記憶宛然、此不可忘不可遣。」とある。
- 32 本相如：本來のありすがたが、眞實そのものとしてあること。
- 33 心生故、即種々法生、云々：『大乘起信論』に、「是故一切法。如鏡中像無體可得。唯心虛妄。以心生則種種法生、心滅則種種法滅故。」(T32-577b)とある。
- 34 觸途：目に觸れるもの、體や知覺などで感じたすべてを指す。『周書』卷四二、列傳第三四に、「遇物論形、觸途湮跡。何淨穢之可分、豈高卑之能擇。」とある。『廣弘明集』卷二四に、「與皎法師書并答」に、「弟子雖實不敏。少嘗好學。頃日枉餘觸途多味。」(T52-275b)とある。
- 35 濟物：他人を救うこと。『抱朴子』内篇卷一〇に、「夫道者、其爲也、善自修以成務。其居也、善取人所不爭。其治也、善絶禍於未起。其施也、善濟物而不德。其動也、善觀民以用心。其靜也、善居慎而無悶。」とある。『廣弘明集』卷二八、「無礙會捨身懺文」に、「故亡身濟物、仁者之恆心。克己利人、君子之常德。」(T52-335a)とある。
- 36 法塵：六塵の一つ。意根の對象である諸ものものを指す。十二處では、法處、十八界では法界という。
- 37 二十五有：衆生が流轉し輪廻する生死の世界を、二十五種に分けたもの。有は、現實に生存する、の意。すなわち、欲界に屬する四惡道、四洲、六欲天の十四有と、色界に屬する梵天、無想天、四禪天、五淨居天の七有と、無色界に屬する四空處天の四有である。
- 38 三塗：地獄、餓鬼、畜生の三惡道のこと。三途ともいう。
- 39 菩提質諦薩埵：天台大師智顛の『菩薩戒義疏』卷上に、「天竺梵音、摩訶菩提質帝薩埵、今言菩薩、略其餘字。譯云、大道心成衆生。」(T10-563a)とある。そのほかに、元照述とされる『觀無量壽佛經義疏』の中にも、次の句がある、「菩薩、梵云摩訶菩提質帝薩埵、此云大道心成衆生。雖名含大小、行有淺深、今此

- 同聞、莫非補處。」(T37-287a)とある。ただ、天台智顛や元照などは「菩提賢帝薩埵」としたところを、智詵は「菩提賢諦薩埵」とした。
- 40 隨眠：阿頼耶識の中に潜在する煩惱のこと、等流習氣の種子をいう。有情の身に隨逐して(相伴って)離れず、阿頼耶識の中に潜在して隠れているのは、あたかも人が眠っているごとくであるところから隨眠という。
- 41 習氣：種子の異名。薰習された氣分(ある經驗的行為によって残された潜在餘力)の意。また、煩惱そのものは盡きても、あとにその習慣性が残っていることをいう。
- 42 荊棘：原意は、いばらのこと。これ以下三語は、いずれも道にとつて障害になるものを意味する。
- 43 藜林：やぶと林のこと。藜は「叢」の俗字。
- 44 坑穽：落とし穴のこと。
- 45 六度：布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の、彼岸に渡る六つの優れた實踐徳目のこと。六波羅蜜と同意。
- 46 無漏智：煩惱のけがれなき佛智のこと。
- 47 出於心量之表、離於言說之外：心識をもってはかる範疇や、言語をもって表現する範疇を超えていること。
- 48 唯佛與佛、乃能知之：ただ佛と佛のみが、よく知ることのできるということ。『妙法蓮華經』卷一、方便品第二に、「佛所成就、第一希有難解之法。唯佛與佛、乃能究盡諸法實相。」(T9-5c)とある。『大方廣十輪經』卷四、刹利旃陀羅現智相品第六に、「唯佛與佛、乃能知之。」(T3-699c)とある。
- 49 分段生死：迷いの世界にさまよう凡夫が受ける生死のこと。また、壽命の長短や肉體の大小など一定の限界を有する分段身となつて輪廻すること。有爲生死ともいう。『成唯識論』卷八に、「生死有二。一分段生死。謂諸有漏、善不善業、由煩惱障緣助勢力、所感三界麁異熟果。身命短長、隨因緣力、有定齊限、故名分段。」(T31-45a)とある。
- 50 變易生死：迷いの世界を超えた聖者が受ける生死のこと。體形や状態などを自由自在に變化しうることから、變易身とする説と、菩薩の身は願力によつて變化、改易することができることから、變易身であるとする説がある。『成唯識論』卷八に、「二不思議變易生死。謂諸無漏、有分別業、由所知障緣助勢力、所感殊勝細異熟果。由悲願力、改轉身命、無定齊限、故名變易。無漏定願、正所資感、妙用難測、名不思議。或名意成身、隨意願成故。」(T31-45a)とある。
- 51 三界火宅、云々：同一文の典故は見あたらないが、

『妙法蓮華經』卷二、譬喻品第三(19—10b)にある「三界火宅」の譬喩によるもの。

體性：中間そのもの自體の本質を指す。

53 譬如千年暗室、明燈纔照、暗境即無：『大方等大集經』卷一に、「譬如一處百年闇室、一燈能破。」(13—4)とあり、また禪宗系の偽經とされる『佛說法王經』に、「又如千年闇室、燃一炬燈、諸闇皆盡。」(85—1387b)とある。また北宗禪の淨覺によって撰述された『注般若波羅蜜多心經』にも引用される。注23前掲拙論を参照されたい。

54 業障・報障・煩惱障：三障という。業障は、業のさわりのこと。報障は、惡業の果報として正道を踏み外すこと。煩惱障は、悟りへの障害となる煩惱をいう。『俱舍論』卷一七、分別業品第四之五に、「重障有三、謂業障、煩惱障、異熟障。」(129—92c)とあり、報障は異熟障と同義とされる。

55 心鏡：佛心を鏡に譬えた語。

56 『五蘊』者、以積聚爲義、云々：智顛の『法界次第初門』卷上之上、五陰初門第二に、「一色陰、有形質礙之法名爲色。…(中略)：二受陰、領納所緣名爲受。…(中略)：三想陰、能取所領之緣相名爲想。…(中略)：四行陰、造作之心能趣於果名爲行。…(中略)：五識陰、了別所緣之境名爲識。」(146—665c)

とあり、また、淨影寺の慧遠の『大乘義章』卷八、五

57 陰義七門分別に、「言五陰者、所謂色受想行識也。質礙名色、又復形現亦名爲色。領納稱受、毘曇亦言覺知名受。取相名想、毘曇亦言順知名想起作名行。了別名識、毘曇亦云分別名識。此之五種、經名爲陰。亦名爲衆。聚積名陰、陰積多法、故復名衆。」(14—621a)とある。

58 駢駢碌碌：せわしくしているが、全く役にたたないさま。

59 三界・四生：三界とは、欲界、色界、無色界のこと。四生とは、あらゆる生きものの四種の生まれ方による分類のこと。四種とは、胎生(母胎から生まれるもの)、卵生(卵から生まれるもの)、濕生(濕氣から生まれるもの)、化生(過去の自分の業力によって作り出され、よりどころなしに、突然に生まれたもの)である。

貧窮困苦：佛教の八苦と違って、當時の世相を反映して、智詵が五蘊盛苦のかわりに、この語を用い、八苦の第一とした。さらに八苦と別に、苦の総合として五盛蘊苦(五蘊盛苦ともいう)の項目も立てた。ただ、現代の人権思想からすると、「皆由過去不修六度、今生受報辛苦、經求皆不得如意。」や「前生種苦因、今生受苦果。」などの表現は、差別を助長するおそれが

- あり、十分注意しなければならぬ。
- 60 男女不孝……息子や娘が親に孝行しないこと。
- 61 生苦者、云々……智説は、生苦を、「生まれること」という傳統的解釋から逸脱し、現に生存する苦、つまり生きる苦しみと解釋した。
- 62 老苦者、云々……老いてゆくという苦しみのこと。智説は多くの實例を擧げて説明しており、その中に「貧窮無子」という表現もある。これは、中國に古來「不孝有三、無後爲大」という言葉があり、例えば、孟子曰、「不孝有三、無後爲大。」趙氏曰、「於禮有不孝者三事。謂阿意曲從、陷親不義、一也。家貧親老、不爲祿仕、二也。不娶無子、絶先祖祀、三也。三者之中、無後爲大。」という如き、根強い儒教思想がその背景にある。
- 63 蛻娘諸虫……くそむし、まるむし、人糞を食う虫のこと。
- 64 恐怖變抜……變抜については意味不詳だが、なみはずれた恐怖という意か。
- 65 拷楚萬端……拷楚とは、拷問などによる苦痛の意。『魏書』卷八九、列傳七七に、「段乃陳列眞香、昔嘗因假、而過幽州。知赦提有好牛、從索不果。今台使心協前事、故威逼部下、拷楚過極、橫以無辜、證成誣罪。」とあり、また道宣の『集神州三寶感通錄』卷上に、「定
- 72 州勇士孫敬德、在防造觀音像。年滿將還在家禮事。後爲賊所引、不堪拷楚、遂妄承罪。」(T52—427a)とある。
- 66 慌言・寐語……慌言とは、ほんやりして、わけのわからないことをいい、寐語とは、寢言のこと。
- 67 努眼・降聲……努眼とは、怒って目をつりあげる意で、努目、怒目と同義。降聲とは、大聲で怒鳴りつけること。
- 68 擅拳捋肘……腕をまくり、肘をさすること。
- 69 麤色……細色(極微)によって作られた麤なる色法のこと。細色の反對語。吉藏の『仁王般若經疏』卷上の二に、「法集故有者、以細色成麤色、名法集故有。」(T33—326b)とある。
- 70 世尊入涅槃時、無色界諸天、淚下如雨……大慈恩寺沙門基の『說無垢稱經疏』卷一に、「此方先德、依現所有經論義旨、總立四宗。……(中略)……只如舊阿含經云、舍利弗入涅槃時、無色界天淚下、如春細雨。」(T38—998b)とあるものの、いずれの『阿含經』からも見出せない。
- 71 識種……識とは、第八識の阿頼耶識のことで、識種とは、阿頼耶識に薰入した善惡の種子のこと。
- 72 見相……『大乘起信論』に説く三細の一つ。また轉相ともいう。その第一の無明業相が展開して第二能見の

相（主觀の作用）をなす位。三細とは、根本無明のあり方を三種に分けたもので、無明業相、能見相、境界相のことをいう。『大乘起信論』に、「云何爲三。一者無明業相。以依不覺故。心動說名爲業。覺則不動、動則有苦、果不離因故。二者能見相。以依動故能見。不動則無見。三者境界相。以依能見故境界妄現。離見則無境界。」(T32—577a) とある。

(つづく)

〈キーワード〉智詵 心經疏 初期禪宗